

腐ったリンゴ

安永三郎

皆さんは腐ったリンゴをみたことがあるだろうか。何日もかまわれずにその場所にじっと座っている腐ったリンゴを。汁を従えてかろうじてバランスを保ってやっとの思いでたっているあのリンゴである。

この腐ったリンゴでもこの世の中に確かに生きているのだ（生きていたというのが正しいかもしれない）。そして次への新しい息吹として種を宿している。そしてその種はやがて発芽し生長して立派なリンゴの実を実らせるであろう。そしてまた腐っていく。

これをみていると人生と重なって仕方ない、人間をみているようでもある。では、人間が腐っているような状態とは。単に「あいつは気に入らない」とか「あいつは人間として本当に腐っている」というようなことではない。人生の長期的な視野である。つまり年をとっている状態である。長期的な時間ではあるが、その時間のスピードは長くなったり、遅くなったりするのである。そして人間には決定的に違うところがある。それは「考え行動できる」ところである。どうせ同じ年をとるのであれば、考えて考えて頭を使って年をとろうじゃないか。考えた上で行動して徹底的に腐ろうじゃないか。種はそういう生き方をする君を望んでいるのではないだろうか。今後の君たちに期待する。

（2009、卒業生を送る言葉）